明治二十六年一月一日印刷
明治二十六年一月一日出版

婦人衛生會雜誌

（非賣品）

第參拾八號

私立
大日本婦人衛生會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本婦人衛生會雜誌
第參拾八號
目次

講演
◎食塩の利用　藥學士　丹波敬三君
◎各種傳染病の固有接種法及び固有治法學の現況に就て
◎新年
衛生談
◎醫師の撰擇
雜錄
◎浴場行日誌　醫學博士　佐々木政吉君
◎長崎に於ける一種の傳染病
◎酒を嫌にする新法
◎樟脳酎製法
◎芥子泥の製法
◎百九十九翁の養生法
◎凍瘡療法
◎麻疹患者
◎震災地と黄疸
◎赤痢患者
本會錄事
◎入會者等數件

◎本會規則摘要

◎本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開き随て社會全般の幸福を增進するにあり

◎本會は毎月一回第一土曜日集會を開き諸大家を聘し講義演説を囑し會員は勿論同親族知己の傍聽を許し且之を筆記して毎月會員に頒つ

◎本會會員を分ち終身特別通常學生男子賛成員とす

◎終身會員は入會の節金拾圓以上を収むる者特別會員は毎月貳拾錢以上通常會員は同拾錢學生其他事故ある者は會費五錢とし男子賛成員は毎月拾錢を納むる者とす

◎入會せんとする者は何人を論せす族籍住所姓名を記し下谷練塀町四十三番地本會事務所へ御申込あるべし

下谷區練塀町四十三番地
大日本婦人衛生會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人衛生會雜誌第參拾八號
（明治二十六年一月一日發兌）

講演

食鹽の利用

明治廿五年十月八日
華族女學校に於て

丹波敬三君

私は食塩の事に就て御話しを致します、食塩と云ふものはドコの御家にでも御座いまして、皆様が御使用になりますが、併し此食塩と云ふものはドウ云ふ利用の有るものかと云ふ事は、御存知ない方も御座いませうかと存じます。ソレ故今日は食塩の効用を御話し仕やうと思ひます。

何れの國何れの村落を論せず、開化して居る國でも極く未開化の國でも食塩を製する法は研究してあります。ソレは何故かと云ふに、食塩が無ければ今日の生活が出來ないのでありますから、如何なる野蠻國で、他の事は何にも知りませんでも、塩を拵へる法を知らぬ國は御座いませぬ、寒國には寒國の法が有り、熱帶國には温熱を利用して出來るやうな法が有ります、海邊は海邊の法があり、數百里も海を隔てゝ居る山の奥には山の奥相當の製法が有ります。

寒い所ではドウして製造するかと云ふに、池を堀ッて滿潮の時に海の水を入れて一夜置きますと、水が氷ります、總べて氷は種々の塩類を溶解したる稀薄の水液より凍結ましても始めは混合物の無い純水ばかり氷るのでありますから、爰に凍結ましたる氷には塩分が混ッて居りませぬ。ソレ故其氷を取ッて捨てゝ仕舞ひ、又其あとに凍結した氷をも捨てゝ仕舞うと云ふやうに、幾度もさうしますると、到頭には水が減じて塩分の澤山にある濃い液になりますから

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

之を煮つめて塩を造り出します。又温かい所では氷らする事は出來ませぬから、夏季殊に土用の中に池を掘ッて海の水を引きまして、炎天に曝し太陽の力で其水分を干乾し塩分は砂の中に吸ひ込ませます。此砂に少しばかり水を入れて砂の中に混ッて居る塩を溶解し此溶解たる者を煮つめて塩を結晶させます又海には數百里隔ッて居る樣な山國ではドウするかと云ふに、塩は海にのみ在るものではありませぬ、山の中にも在ります。殊に山の塩は石塩と云ッて海の塩よりは餘程清潔のものであります。其質の良き塩ならば之を掘出して粉にして製る、或は又其質が不純にして掘出すも直に用便にならざる品は、塩の在りさうな所へ穴を掘り之に水を流し込みます、然して其下の方の低い所から上の方より滲漉したる水を酌込みます、此れは塩の在る所を流れたのだから塩を溶解して來て居ります。此れを蒸散屋と申します器械（梁柱のみを以て家屋を作り枯れたる樹枝を以て梁柱間を充たし枝壁となしたるもの）に流し込みます、サウすると水が大變に早く揮發して塩が濃くなります、濃くなつてから煎じつめて塩に致します。斯う云ふ工合にドコの國にても塩を製造する方法を具ッて居るはドウ云ふ譯か、塩と云ふものを生活するに就て必ず欠く可からざる理由がなければ斯樣に未開の人までも悉く製法を知る道理が無い又生理學上化學上より考へても塩がなければならぬと云ふ理由が御座います。其理由をば是れより御話し致します。

爰に塩の標品數種を持て參りました、（此時小さき瓶に入れたる食塩數種を示さる）（石塩を取上げ）斯う云ふ良い塩であると直ちに食料に用ゐられる。今、日本で用れて居る塩は、海邊にて海水を砂上に注ぎ炎天に乾かして塩分を悉く砂に吸収ましめ

之に水少許を加へて溶解して製したので有りますが（普通の食塩を示し）是等の塩の中には塩の成分外のものがいろ〳〵混ッて居る、化學上より製したもので少しも混交物の無い純粋の塩は、是れ化學上より製したる純粋塩を示す）で御座います化學上純粋の塩は「ナトリウム」と云ふ金屬と、「クロール」と云ふ瓦斯との二ッより成り立ッたもので御座います「クロール」と云ふ瓦斯は見る事は出來ませぬが、少しく緑色を帯びて居ります（一個の大瓶を示し）此瓶の中は空のやうですがわをきいろの空氣の様になッて居るのが即ち「クロール」と云ふ瓦斯で有ります。此小瓶に有るのが那篤留謨と云ふ金屬を、石油の中に貯へて有るので御座います。那篤留謨を水の中に投にますと直ぐに燃えます故、石油の中に入れて置くので御座います。此那篤留謨と云ふ金屬と「クロール」と云ふ瓦斯とが結び附いて化學的純粋の塩が出來るので有ります。

今爰にて化學的純粋の塩を製造して御覧に入れます

那篤留謨少許を「クロール」瓦斯の瓶中に投ずれば暫時にして瓶の四邊に白き粉を附着す是れ即ち純粋の塩なり

此食塩が体内に於きましてなければならぬ必要が御座います、又食物を消化するには食塩か尤も必要でわります、一日の中に男女に拘わらず大人即ち成長した人に於ては是れ丈け（一の小瓶に食塩凡そ十三、五グラムを充たしたるものを示す）の塩を毎日身体から排泄します、シテ見ると、からだの中に塩を製造する所があると云ふ譯では有りませぬから、人は毎日少なくも是れ丈けの分量の塩を外から体内に入れなければならぬ譯でわります体内に於ける塩の必要なる事、又之を体内に入れなければドウ云ふ事になるかと云ふ事は、學問上より理由を説くまでもなく

此地球の上に於て實例が澤山有ります。例へば極めて北方の國、唯今露西亞領になッて居るカムシャッカ邊りでは、常に獸肉魚肉のみを食しまして、米穀馬鈴薯、其他野菜類を少しも食しませぬ、肉類で御座いますれば、其肉の內に塩分を含んで居りまするから別段に塩を用ゐる必要は無い、併し其國でも塩の製造法を知ッて居りますが、是れを用るとは好みません、彼地では夏になると魚が少ないから冬の中に澤山に蓄ゐて置きます、丁度日本などゝは反對で冬は漁が多くて夏になると少ない、冬捕れたものを夏の食料に貯へる。此貯へ方は地中に穴を掘ッて魚肉でも獸肉でも皆其中に放り込んで置いて、食料の少なくなつた時に取り出して食べるのであります併しソレでは腐敗する恐れが有りますから、露西亞領になッてから大變嚴重に規則を設けて、貯ゐるならば充分に塩に漬けて塩ものとして貯ゐなければならぬと云ッて、時々巡査が見廻ッてあるきます。併し其土地の者は規則通りに、魚肉獸肉を塩漬にして貯ゐて置ますが、實際食する時にはソレを食するかと云ふに、其傍らに塩漬にせないで其儘に貯えて置きましたる魚獸を食します、少々腐ッて居ッても塩にしないものを食べて居ります。ソレ故ドウしても是れを規則上取締る事は出來ない。なぜ斯樣に塩の物を嫌ふかと云ふに、野菜類を少しも食しませんで魚肉幷に獸肉を主として食料にいたしますから肉類中には体內に必要だから塩を含んで居ります故に自然に塩味を食べたいと云ふ念は起らない。非常に腐敗して居ッて衛生に害が有らうが左樣な事には構はず塩にしないものを食しまして、規則は規則だから仕方がないといッて塩にしたものも貯ゐては居りますが、三年でも五年でも其儘にして置いてあります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

又ソレと丁度反對で、亞弗利加の砂漠に參ると、元より砂漠ですから鹽の氣抔は少しも有りませぬ。所々に村落があツて、ソコにのみは樹木が繁茂して居ります。獸類なぞは食はうと云ツても砂漠の事ですからありませぬ。彼樣の所に住居する人民は處々に生ずる野菜類を取ツて常食として、今日を過して居ります此野菜中には鹽分を含んで居りませぬゆへどうしても鹽が無くては生命を繋ぐとは出來ませぬソコで鹽を大變に好ひます。ソレ故小供に鹽を遣ると、氷砂糖にても貰ツたやうに喜んで食べて居ります。サウ云ふ情況でありますから、此村落に一ツ所でも鹽の取れる所が有りますとソレが爲めに喧嘩が起りまり。一方では取ると云ひ一方では取らせまいといツて互に生死を境として鹽を得るとを考へて居る、ソレ故此村落に於ては、絶間なしに死傷が澤山に出來て居ります、何故かと云ふに食物と言へば野菜類のみ故、鹽がなければ生活が出來ないから身体の必要から自然と鹽が欲くなるので御座ます。是れは單に人間社會ばかりではない、動物の社會に於ても、少しも違ひはありませぬ。鹿と云ふ獸は、野菜のみを食して生活を致しますから鹽を好ます。ソレ故昔から獵師が鹿を打つにドウ云ふ所に見當を附けて打ツたら宜いかと云ふに、鹽の有る所に往ツて待ツて居れば、必ずソコに鹿が參りますさうです。又昔しからの咄しにも能く申すとですが鹿が海邊に鹽を取りに參りますと、漁師所謂曳網が之を捕て、漁師と獵師との喧嘩になツた抔と云ふとが有りますが、實際の事で御座います。鹿は山に鹽の無い時は海に出て鹽を取ります。今申上げました通り食物が野菜物でありますから、鹽氣がなければ生活する事が出來ませぬから、打ち殺さるゝと知りつゝも鹽分の欠耗の爲めに死ぬか、或は鹽水の有る所に往

ッて打ち殺さるゝか、塩分の有の處に往けば間が好ければ逃るゝことを得るといふので、危きも知りつゝ必ずソコに來るのであります。ソレに反して、肉類ばかり食べて居る虎豹或は獅子は塩には少しも用が無い、ソレ故虎或は獅子に塩の有る肉を遣りましても幾日經ッても食べませぬ、腐敗して居ッても塩分のないものを遣ると喜んで食べます。サウして見ますると學問上より塩は生活するに必要であると理解するまでもなく、實際上に人間社會、動物社會に於て既に前に申上げた樣な事が現に有るのです。ソレですから塩は人間の生活上に缺くべからざる必要が有ると云ふ事は解かります。

學問上からはドウ云ふ理由が有るかと云ふに、總べて体内の肉をこしらゐたり、或は仕事をする氣力を養ふのは蛋白質の作用でソレが体内に這入ッて分解されて、是れに依て働く事も出來れば肥るとも出來れば、從て血液も殖へて來る、所が塩がないと此蛋白質を分解して消化する事が出來ない、分解して消化する事か出來なかッたならば働く事も出來ず、肥らす事も出來ない、ソレ故知らず識らず食物の中より塩の這入ッて來るのも有りますシ、又態々でも鹽分の欲いといふ念が起ッて用ふるともあります。ソレで人間一人に就てドの位ゐの塩を遣ふかと云ふに、一年中の平均を見ますると七基七分、……十五斤程の塩を一人が一年の間に用ひて居ります。コレ程大切なる鹽で御座いますから、ソレ故鹽を製造るのはドンな野蠻の國でも、其方法を發見して拵へるやうになッて居ります、又此鹽は生活上に大切のみならず、化學上に於ても石鹸曹達等を拵へるには鹽がなければ出來ませぬ。其外鹽を用ひて拵へまする製品は澤山御座います。ソレから鹽の利用と云ふものは誠に鴻大で御座います。人が塩絶ちと云ふ事を

致しますが、永く鹽絶ちを致しまするど、身体勞かれて中々回復するとは出來ませぬ、鹽丈け除いても外の滋養物を用ひれば宜からうと思はれますが、只今前申した樣な理由から鹽を絶ちまするど、生活を保續するとが出來ずして、死んで仕舞ひます。

鹽と云ふものは是れ程必要の有る大切のもので有りまするが、是れを用ひるに、其擇び方が洵に粗造で有ります、只今日本などで用ゐて居る御覽の通りの此鹽は純粋の鹽ばかりでは決してない、色々の不潔物が澤山に混ッて居る、其中には害をなすものも幾らか御座います、少し用ゐて居るから知れずに居りますが、永く用ゐまするど、害を爲すものが澤山おります、價値を廉く販賣して居りますから、慾に純粋の鹽に改めやうとするど、非常に高價のもので、迚も日常の用に供する事は出來ないが、日常の用に供するには化學的純粋の鹽でなくても宜しう御座いますが、併し一年に十五斤も体内に入れるので御座いますから、是れに少しでも不潔物が混じて居りましては害を致しますから、成べく良き品を擇んで御用ゐにならねばなりませぬ。

只今市中で賣ッて居ります鹽を改良して、幾らか好き鹽を拵へる法は無いか知らんと思ッて色々考へましたがいまだ好い考へも出ませぬけれども、昔から仕來ッた法に依りまして鹽を俵のなりに取りまして大きな鉢……例へば擂鉢のやうのもの丶上に薪を渡し其上に鹽の俵を置いて、二月も三月も經ちますと自然と空氣中から鹽が水を引きます、其水の內に鹽が多少溶けますが、其溶ける中にも惡い部分が早く溶けます、良い部分のものは溶け樣が遲い、ソレ故水を引て溶けます分は惡い鹽の部分で、俵の中に殘ッた鹽は、元の粗製のものよりは遙かに上等の品となります、舎利鹽と申し、下剤に用るますは硫酸麻

屈涅叟謨などは、前の如き方法にて食塩より滴りたる海汁を以て製します。之には姑息の法で誠に不完全では御座いますが。ソレでも普通の物を御用ゐになるよりは幾何か利益になり好き塩が得られやうと思ひます。

今日本で年々製して居りまする塩は實に夥しきもので六百万石以上の高で御座います、六百万石の塩を年々に造りますのみならず、尚ほ西洋諸國から輸入致しまする高も、實に澤山の高で御座います、尚はソレに止まらず一日一日と進歩して行く勢で御座います。故に其多額の需用ある食塩に對して、改良を加へて好き塩を拵へましたならば、健康上明らかの進歩であると思ひます。今日は少し後にまだ御相談も御座いますさうですから、短く繰り上げて是れ丈けに致して置きます。

各種傳染病の固有接種法及び固有治法學の現況に就て

右は北里醫學博士の大日本衛生會に於て講演せられたるものなれ共本會適切の者に付こゝに掲載することゝはなしぬ

諸君、傳染病を眞に學術的に研究するとの創まりましたは極く近來のことであります夫の佛蘭西のパストコールと獨逸のロベルト古弗の兩氏が多くの傳染病の原因を發見しましてから初めて傳染病を學術的に研究する道が開けたのであります今日私しが此處に掲げました題は少し長うございますが併しソウ八釜しいことではありません是れまで傳染病を豫防するには如何なる方法でやつたか近來は如何なる方法でやるか一個人の身体に就て之を防ぐことが出來るか又之を豫防するのみならず治療することが出來るかどうかといふ點が今日醫學社會一般の疑問でありまして其道の開けたのは極く此頃の事でありますが

る此事に就て現時の景况を御話し致さうと思つて居ります

傳染病の原因は種々ござりましやうが今日まで發見された所の病原は大別すれば二種になります其一は極下等植物性の物即ちバクテリヤ其一は近來分りました極下等動物性の物即ちプロトッオンであります此から後復たどう云ふ物が出て來るか知れません今日では先づ此二種の外はありません其バクテリヤの撿索法は此頃では餘程進歩して居ますがプロトッオンの方は其發見もツイ此頃のとでありますから撿索法もバクテリヤ程には進歩して居りませんバクテリヤの方はバクテリヲロギー即ち黴菌學と云ふ一種の學科となりました通りに中々の進歩であります人間で云へば亞細亞虎列剌動物の方で云へば鷄虎列剌脾脫疽抔といふ傳染病の病原となるものはバクテリヤでありますが其バクテリヤが人間なり動物なりの体中に這入りまして病を起します作用が二通りあります第一はバクテリヤが体中に於て非常に澤山に蕃殖し血管抔にもバクテリヤが一杯に充ち血液の循環も何にも出來ぬ樣になるのと第二はバクテリヤが体中に這入ると感染したる局部に止まり此處に於て發育すると共に一種の物を産生する其産生物が毒であつて此毒が体中に廻つて病を起すのと二通りの作用があります第一に屬する病氣はミルッブランド即はち脾脫疽と申しまして重もに動物に在る病でありますが人間でも其病獸に接しました時には傳染する所の病で日本にもあるさうです故に脾脫疽は脾脫疽バクテリヤが身体に這入り血の中にも筋肉の中にも何處にも彼所にも身体一杯に蕃殖充滿して人を殺し動物を斃すのであります又第二に屬すのものは實布垤里亞とか破傷風とか又虎列剌とかであります此等はバクテリヤが局部に止りて産生した毒物が身体に廻

りて起る所の病氣であります。

バクテリヤが身体に這入り如何なる働きを爲して病氣を起させるとか云ふ樣なとは餘り學說上の方に入り過ぎまして或は御分りになり兼ねる御方もありましやうから此處では只其大要だけを申述べますが諸君も御承知の通り種痘と云ふものは今より百年も前に英國に於て發見されたのでありますが其發見せられたるは學理上研究を積んでからのとではなく只偶然の發見でありますから如何なる譯で種痘をすれば人が疱瘡に罹からぬと云ふ理屈は今日まで分りませなかつた其發見者たるゼンナル氏が此結構なる疱瘡の豫防法を遺して呉れましたのに今日まで種痘を爲せば何故疱瘡の豫防が出來ると其原理を知らなかつたと云ふは實に傳染病の研究に從事する學者の罪でありまして吾々はゼンナル氏に對して恥かしい次第でありましたが幸ひ此頃に至りまして其理屈が餘程分つて參りました是れは佛蘭西のパストゥール氏と獨逸の古弗氏との賜と申して宜しうござります。

今日まで研究致しました所ではバクテリヤが体中に這入りまして一種の毒物を產生し其毒の爲めに病を起すのを禦ぎますよりはバクテリヤが身体一杯に這りて害を爲すのを禦ぐ方が餘程難いのであります即ち前に申しました第一の方が第二の方よりも禦ぎ難いのであります第二の方に於きましては實布垤利亞破傷風の如きものは餘程精密なる研究が出來まして其研究の結果は之を他の者同樣に毒物の產生物に原因する傳染病に對しましては適用するとが出來るだらうと云ふとは學者社會が是認する樣になりました其事柄を申します前に一寸と一言述べます傳染病も種々ありますが今日皆其病原が分て居るのではありませぬ是から向き吾々が勉強して行けば悉く分るのでありませうが今日までに分て居りますのは亞細亞虎

列刺のコンマバチルヽス腸窒扶斯の窒扶私バチルヽス實布垤里亞の實布的里亞バチルヽス肺勞の結核バチルヽス破傷風の破傷風バチルヽス其外水腫バチルヽス癩病バチルヽス復歸熱スピリルレンと云ふ樣なものであります又動物に來る所の脾脫疽鷄虎列刺の病原牛の酢疽バチルヽス馬鼻疽バチルヽス或は豚に於ける一種のロートラウフ鼠のゼフチケミバチルヽス尙は外に人間に來る丹毒の丹毒ストプレトコッケン醸膿コッケン等であります此等は皆植物性即ちバクテリヤの方でありますがプロトッオン即ち下等動物性の病原となります者は麻刺利亞俗に言ふ瘧でありまして其病原はマラリヤプラスモーゼンと云ふことが知れて居ります夫れから赤痢にはマラリヤの病原より少し大きいアミヨウベンと云ふものでありまして其病原は是れであらうと云ふとは眞を得て居るものと存じます病原の知れて居るものは此位のものでありまして其外知れぬ所のものが澤山あります即ち疱瘡の病原は何であるか吾々は今日尙之を知りませぬ種痘をして疱瘡を避ける事は知りながら其の原因は未だ分りません麻疹の病原も未だ分りません腥紅熱の病原も未だ分りません總て皮膚に出來まする傳染病原は今日まで分らぬと申して宜しい位であります是れ等に就ては吾々は此向き研究に研究を重ねて發見しなければならぬ義務を以て居るものであります夫れから人が狂犬に嚙まれますと狂犬と同じ樣の病を起ます狂犬病も一種の傳染病でありまして之を豫防し治療する方法は既に佛蘭西のパストユール氏が發見しましたが其病原に至ては未だ分りませぬ此の通り傳染病の病原に未だ分らぬものが澤山ありますから先づ其病原を見附け出して夫れから豫防したり治療したりする方法を研究するのが順序の樣でありますけれども中々病原の一々分るまで待ッて居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

る譯には行きませぬ先づ其分りて居る丈に就て豫防治療の方法を研究しなければなりませぬ一昨年古弗氏が肺結核の治療法を發見致しました以來傳染病の研究は一新面目を開きまして傳染病學者が之を豫防し之を治療する方法を研究するに全く他の方向を取る樣になりましたさうして古弗氏の肺結核新療藥たるツベルクリンと云ふものは其原質は何物かと申しますと結核バチルヽスが產生した物で前に申しました人体に害を爲す所の毒物であります故に其治療法は毒を以て毒を制すると云ふ目的であります古弗氏が此方法を發見致しましてからは傳染病中其病原の分ツて居りますものは皆此目的に從て研究する樣になりまして醫學社會では此研究が流行物の樣になりまして何れも試驗所を設けて此事に首を衝込んで居ると申しても宜しい有樣であります

扨一たび或る傳染病に罹ると再び其病に感じない或は一定時間再び其病に罹らないと云ふとは是れ迄の經驗で確かなとであります一回疱瘡を病むときは終身何程激症の疱瘡が流行しましても感じない又一回種痘をして善感した者は四五年内は疱瘡に罹らないとは諸君も御存知の通りであります又腸窒扶斯も一回煩つたら生涯再感せぬと云ふ位で是れ又確かなものであります痲疹も同樣であります一体一二の取除はありましやうが總て傳染病は一たび罹れば再び罹らぬ良し罹つた所が餘程輕いと云ふのは傳染病の通性でござります扨一回罹れば何故に之を禦ぐとが出來るか再び其病に罹らないかと云ふ學理上の問題に就きましては種々の說がござりまして學者の中でも今日まで色々に說が分れて一定して居りませぬが併しながら一たび罹りて再感せぬと云ふとに就ては何所にか之を禦ぐものがあるであらう其禦ぐ所のものは何所に在るかと云ふは誰れも考へ附き易い事で餘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

程穿鑿の致し易いとですが之れ就にても此間まで種々の説がござりまして其中最も八釜しく又最も世上に知れ渡て居りますのは露西亞のメチニコッフの説であります此人の説に據りますると一たび脾脱疽の如き傳染病に罹り夫れが癒へた動物に再び脾脱疽バチルレスを植ゑると其病原たるバクテリヤの人間にても動物にても其体中に在る所の細胞に取圍まれ其圍を脱して働きをするとの出來ない樣にせらるゝ其細胞は何程多くのバクテリヤが這入つて來ても悉く之を取捲くのみならず片端から喰つて行くからバクテリヤは病氣を起すまでの度にならぬ前に細胞に喰はれて消滅して仕舞ふ一回脾脱疽に罹りそれが癒へた体中の細胞は此様なる働きを爲すが故に再感せぬのであると云ふ説であります成程此説は或る病氣即ち脾脱疽の様なものに於ては一理ある説でありました現にメチニコッフの拵へましたプレハテートを見まするに多くのバチルレンが縮こまつて居ります此事は現に實驗のあるとでありますから或部分に向つてメチニコッフの説は餘程確かな者で有ますが併しバクテリヤが身体一杯に蕃殖するのでなく唯一局部に止りて其處で毒物を産生し其毒物が全身に回りて害を爲す方に於きましてはメチハコッフの説は誠に薄弱なもので一向證據立にならぬ者で有ります。

そこでどうして禦げるかどうして毒を殺すものであるか其譯柄は如何と云ふ問題の解釋は中々附きませぬ此問題を解釋する爲めには大分仕事を致した者がありまして日本に於ては此處に列席されて居る緒方博士が仕事を致しました併し緒方博士の實驗は只天然免疫の動物血液を以て他の動物を免疫さする方法でありまして其方法の可否は追々陳べまするで分りますが諸學者の仕事の成績では血液の中にはバチルレン及び其産生した所の毒を殺しまする一種の物質

があるのである緒方博士の試驗では或病氣は動物の種類に依りては一向に感染しない者がある犬は脾脫疽に罹るとは極く稀で殆んど無いと言ふても善い又はモルモットは鼠のセプチケミイと云大變害のあるバチルレンを植ゑても病に罹らぬ又斯う云ふ風に人工でやらずとも天然に或病氣に罹らぬ動物がある其罹らぬ動物の血の中に其バクテリヤを入れると此バクテリヤは產生物を拵へ掛らぬのみならず自ら死してしまう又脾脫疽は動物の種類に依て一向感じない白鼠の大きな奴がありますが是れ抔は一向脾脫疽病に感じないものであります所で白鼠の大きな奴の血液を取りまして其中に脾脫疽バチルヽスを植ゑて見るとそれに植わらざるのみならず又發育せざるのみならず血液の爲めに遂に殺されて仕舞まする斯くの如く病毒を殺しまする其血の働はどれだけの力があると云ふ算用をした人がござりますが其人の算用にては丁度五十倍位の石炭酸の中へバチルレンを入れただけの働があると申します石炭酸がバチルレンを殺す働は餘程強いものでありますが其五十倍位のものと云ふと虎列剌の原因となるバクテリヤを僅かに數分間の中に殺す位強いものでありますが脾脫疽のバチルレンを其五十倍位の石炭酸の中に入れて殺すだけの力が白鼠の血の中に含んで居ります又天然に或病氣に罹らぬ動物の何故に罹らぬかと云ふことが是れまで分らなかつたのが今日に至つては前に申した諸學者の試驗で血液の中に病毒を禦ぎ且つ之を殺す所の一種固有の物質を具へて居る故であると云ふことが分つて來ました其物質は如何なるものかと云ふことは種々說があつて今日まで未だ善く分りませぬが一種の蛋白質で之れをアンチトキシーネと名けました又それと同じく病を惹起す所の原因になるバクテリヤの產出するものが矢張一種の蛋白質のもの

で之れをトキシアルブミイチと名けてありますが其物質は何だか分りませぬさう云ふ風で毒も一種の蛋白質之れを禦ぐ所の物も亦蛋白質即ち性質の近い物が出會つて之れを禦ぐのであります而して天然で病毒を禦ぐ所の動物の血液は之れを他の動物に接種しましても其動物をして免疫せしむるとは出來ませぬ是は實驗上確實なる證明がありまして天然免疫の動物血液は豫防接種上には何の効能もなく隨て寸毫も價値なきものとなりました故に人工で免疫させたる動物の血液でなければ之れを實用に供するとは出來ないものでありますさて人工で動物を實布垤里亞或は破傷風に罹らせぬ方法がござります其方法は最も其病氣に罹り易い動物を捕へてやるのが利目が強くなつて來ます例へば實布垤里亞はモルモットが罹り易い破傷風には馬が最も罹り易い混雜しますから此處では専ら破傷風に就て御話を致します併し實布垤里亞も理屈に於ては同じ事であります

破傷風の毒を人工で發育させる法がござります獨り破傷風バチルヽスのみならず肺結核バチルヽスでも虎列剌バチルヽスでも腸窒扶斯のバチルヽスでも是れまで分つて居るバクテリヤは人工で發育させることが出來ますが其破傷風の原因となる破傷風バチルヽスと云ふものを人工で發育させると善く發生します發生するとそれが一の産生物を拵へる其産生物は甚だしい毒物でござります此毒は化學の藥を加へ之を弱める法があります即ち破傷風や實布垤里亞の毒を弱めるにはヨウドトリコロリッドと云ふものが適當して居ります其始めは僅か一滴を以て馬一匹を殺す程の強い毒力のものでも此藥を入れて弱めれば十滴や廿滴差込でも死なぬやうになりますさう云ふ風にして毒を弱めてそれを幾つも拵へて置いて極く弱い毒から注入して次第に毒を強めて往つて仕舞ひに

は餘程強い毒を注入しても其馬は破傷風に罹らぬやうになります斯の如くして三週間も馬に殖ゑ續けますと其馬は最早如何なる破傷風の毒を持つて往つて注入しても決して破傷風に罹らぬやうになりますさうした所で其馬の血を取りまして其血を外の動物に植ゑる例へば鼠とかモルモットのやうなものに植ゑて十時間程立つた後に今度は破傷風の毒の極強いのを持て來て其の鼠やモルモットに植ゑて決して破傷風に罹りませぬ之れと同時に對照試驗と云つて此の毒が是れが利くか利かぬかと云ふことを見る爲めに始めに血を衝込まない新しい動物に其毒を植ゑますれば直ちに破傷風に罹つて死にます即ち一遍破傷風に罹らせて其れを禦止めた動物の血液は之を他の動物に衝込みますと其動物は破傷風に罹らぬ樣になり破傷風の毒を禦ぐ樣になりますのは即ちアントトキシーチの力であります一体血液は之を器に入れて据ゑて置くと血が澄んで來て血精と云ふものが出來ますアンチトキシーチは重もに此血精の中にありますから他の動物の病を豫防する爲めには血精を用ゐまするが扨此血精は唯外の動物をして其病氣に罹らしめざるだけの事に止まれるか既に病に罹つた動物でも此血液を以て療治をすれば癒るであらうかと云ふ問が起ります破傷風と云ものは醫學者諸君には申す迄もなく御存知のとでありますが身体中何處か疵を致しますと其疵口から病毒が這入つて來る者でありまして病毒が十分身躰に廻りました上は人間でも動物でも筋張つてしまつて少しも動かぬやうになる所謂痙攣強直を起しますが動物に破傷風毒を植てから云ふ病氣を起させて置いて今度は右の血液を以て其病動物の療治を始めまする扨豫防する方では僅の量の血液で宜しうございますが療治をする方には餘程多量の血液が入ります矢張り種痘と同じで豫防するに

は僅かで善い諸君も御存知の通り種痘をすれば五六年の間はどういふ痘瘡が來ても罹らぬと云ふ樣な効能がありますが種痘をするに痘漿と云ふ者は極く僅の量であります其通り破傷風の豫防も僅の血液で出來ますが療治をすると云ふ時は血液がまだ十分にアンチトキシーネを含んで居りませぬと十五倍乃至百倍程も餘計に衝込まなければなりませぬ例へば豫防接種には僅かに一グラムの百分一位で豫防が出來ます先づ一滴位で出來ますが病に罹つたものを療治するには百滴も衝込まなければならぬのです併し如何に強く罹つて居る所の動物でも其始め善く破傷風に慣れ付いて居る馬の血を以て療治をする時には療治が出來て其動物は漸う治癒に赴いて終には回復に至りまするそれですから其血液と云ふものは獨り豫防許りでなく之れを治療することも出來る譯に今日はなつて居ります是れは破傷風のみならず小兒の爲めに最も恐るべき所の實布垤里亞に於きましても同じことであります

併しながら破傷風や實布垤里亞の豫防及び療治法は今日までは只動物に試驗したまでゞ之を人間に試驗することは此頃漸く始めた位で人間の實地にやることはまた十分に試驗が積んで居りませぬからしてそれに罹つた者を悉く治療することが出來るかと云ふと是れから先き益々研究に研究を重ねて行きましたなれば此事の出來ると云ふとは確かでありまして私しは決して疑がひませぬ

それから又一ッ面白いとは動物が或病氣に罹り易ければ罹り易い程之れをして一遍病氣に罹ることを禦いだ後は其動物の血液と云ふものは他の罹り惡い所の動物の血液から見れば病毒を殺す力が強くなつて來て全く反對の結果になッて來ることは今日殆んど原則のやうになッて居りますそれで血液療法を以て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

やらうとすれば一番罹り易い所の動物を其毒に慣れさせて置いて之れを以てやるが一番宜しうございます併し此血液療法と云ふものは今申述るやうに之を禦ぐには種痘をするやうに植ゑて十分の効力あり又人間に實施しても必らず効のあることでございまするが治療には豫防するよりも百倍も多量に注入しなければなりませぬからして實際餘程難いことであります此頃では血液を直ちに衝込まないで或化學の方法を製造して血液の中にあるアンチトキシー子を成可く集め其量を少くして其利き目を多くしてやるやうにしたら善からうと云ッてアルコホールのやうなもので血精を沈澱さして種々研究して居りますがまだ今日迄では血精を沈澱させてアンチトキシー子を十分濃厚にさせる名法がございませぬから引続て其方法の研究中であります是れも今少し立つたら必らず其法が出て來るでございませうさう云ふ風でござりますからして血液を以て直ちに療治することは未だ餘程難い餘程難いと云ふのはそれだけの量を人間の身體に衝込むことにすると一日一合位衝込まなければなりませぬから之れを直ちに治療法に用ゐるは餘程困難な話であります。

（以下次號）

新年

一陽來復の賑はしさ、軒端并らぶる松かざり、國旗は風に飜へり、賀客は門に往來し、一ごに二ご三な四ツて遣羽子するやら手鞠唄紙鳶のうなりも、長閑にて、社會の上下老若を問はず、皆業務を休み隨意の遊戯をなして新年を祝さゞる者はなし。

熟々考ふるに正月の事物は衛生上に縁故のあるようで御座います、即ち松竹と云ひ重詰と云ひ皆健康長壽を祈るもの々如く、煮豆詔陽魚は（健康になる様にと）鯟鯑は子孫繁昌を表するものでありましやう

併し正月には何れの家でも客あれば酒を強いるの風が有ますから、爲に宿酔の弊を起したり、或は三ヶ日の雜煮を食ひ過ぎて、何れも腸胃を害しましたり或は骨牌遊に一室を閉じ込めて、爲めに頭痛を起すがごときことは、よく／＼御注意になりたきことであります（正月の衛生に就ては本會雜誌拾五號に岡田醫學士の論説がありますから御參考あれ）先は新年を祝し併せて本會及會員の萬福を祈る。

衛生談

醫師の撰擇

T　T、

新年早々から醫師の撰擇でもありませんが、新年も目出たいと云へば至極目出たいわけで御座います、又能く／＼考へて見ますれば冥途の旅の一里塚、老少無常の世の中でありますから、醫師撰擇の用意もあながち無益でもありますまい。

さて病家の醫師を撰びますことは、極めて必要で、誰れも承知して居ります、况んや學識交際等兼ねそなわる皆樣のことでありますから、書くも無益の事ながら、世間には随分不思議な撰び方もございます、先醫師の履歴などには少しも頓着せず、只玄關構とか、腕車が立派だとか、衣服の善悪、鼻の高低、顔の造り方（是はチト迷惑な話し）とか、或は猥りに人の褒貶によりて醫師を撰ぶ者も御座います、左様でありますれば貴重なる生命を弄ぞぶ様なものでありますから　充分注意しなければなりませぬ、殊に民間の　開業醫中には、偷安流、幇間流など、軍法劒者の達人（否）醫學研究の不達人があります、是は中々油斷がなりませぬ、鼻高きが故に貴からず八

字の髯は學力を代表しません、胸邊金鎖燦然として目を驚かし、モーニングコート身に適するも、腦中無一物では仕方がないのであります、今日醫者の外貌を飾る風習のあるのは、ツマリ世の人が外貌を以て醫者をゑらびますから、醫者も又其需めに應して外貌ばかり飾りことに意を用ゐ、必要な器械を買はない樣になるのであります、ソレでありますから開業醫中には顯微鏡の如き必要なるものを持つて居るものは少ないのであります、夫故是からは醫者を撰ぶには平時よりよく其履歴を取調べて置きたいものであります。

今醫者の段楷を記るせば左の如くであります。

第一は我大學を卒業し外國の大學にて専門科を修め充分經驗のあるもの

第二は我大學卒業或は外國の醫學校を卒業のもの

第三は高等中學醫學部又は府縣の醫學校を卒業したるもの

第四は内務省の醫術開業試驗に及第しるもの

第五履歴免狀、府縣限りの免狀、假免狀等を所持するもの

雜錄

浴場行日誌（前號の續）

醫學博士　佐々木政吉君

三月二十九日　曇る午前七時ドレスデンを發す途中ボーデンバッハと稱する所あり是より墺帝の治下に屬すベーメン州是なり茲所にて旅劵の檢査を受け「アシヽグ」停車場に小憩し十二時十分テープリッツに着す「ツウム、アルテン、ラートハウス」と稱する「ホテル」に着す車中の客ミユンヘンの人なり余

のテープリッツ浴場を見んと欲するを聞き語て曰くテープリッツは有名の浴場なりと雖とも今や純然たる療養所たるに適せず何となれば近頃石炭及鉄の貿買盛にして一の製造場市となれるを以て其浴場たる聲價を減せりと

ドレスデンより「エルベ」河に沿ひ汽車に駕してベーメンに赴く途上觸目の山川秀美なり今其一般を記せん

列車の左方洋々滾々として流るゝものは「エルベ」河なり沿河千尺の斷岩恰も屏風を列ねたるか如し幾許の巉岩空に聳へ絶壁天に朝す石層疊むか如く累々層々明に其界を見るへく水流激湍して宛も白雪を飛散し大樹懸崖より倒に生し或は數層を重疊したる互巖溪流の兩岸より突出し天然の橋梁を爲すものあり或は、巉岩直立したる間に石造の飛橋を設け勁風之に觸るゝときは其顚墜を恐るゝの觀あり車中の乘客をして風景の送迎に遑あらざらしむ實に奇景萬態を集むるものにして神設、鬼構、巧を鏤め妙を極し造化の斧を借りて始めて此風景を作るを得へく巧妙なる畫家と雖も之れを寫すこと難かるへし此邊風光の美なる日耳曼第一にして歐洲大陸の勝を訪ふ者一たび必す此所に來ると云ふ宜なる哉人呼でザキセンのシワイッと云ふ惜哉本日天氣晴朗ならす是を憾と爲す、

テプリッツに着するや風塵を捲き加之寒を覺へ街道清潔ならす頗る不快の感あり一時晝餐を喫し少憩して直に浴場に赴く途中書賈に就きテプリッツを記したる一二の小冊子を購へり店主余か爲に浴場監督者に紹介の一書を與へたり厚誼感す可し即ち先つ(皇帝)浴場(玆に浴場事務所あり)に至る監督者未た來らす時に午後二時なり即ち浴場に附屬する公園散歩場及侯爵クラレイ氏の庭園及住居等を徘徊

し夫より「ウヰルヘルム、フリードリヒ」岡に登り一望す蓋し已に嚴然たる一都會なり岡上ウヰルヘルム、フリードリヒ帝の紀念標を見る岡を下り再ひ皇帝浴に至る主幹シローテル氏已に在り即ち來意を通し書賈の與ふる所の紹介書を出し浴場の結構裝置を一覽せんことを乞ふ氏快く之を諾し大に喜て曰く前年貴國人二名此地に遊ひしことあるを語り余に贈るに浴場を記したる小本二冊を以てす直ちに余を伴ひて先つ皇帝浴の浴槽を示す地盤は「セメント」を以て固め浴器は直に地盤より陶器製の瓦を以て重積し内に梯段を設け浴者をして全身浴又は半身浴を取るの便を與へしむ冷溫二泉を送るには捻什掛を以てす頗る清潔にして人をして快然たらしむ余此礦泉を飲むに弱亞兒加里性を帶び且鹽味を有し澄明なり之より氏と共に市浴場に赴く道すがら氏語て曰く人若し神經痛、關節捩麻質斯、神經病に罹り「テプリッツ」に浴する二週間なれは必す快癒すと云ふ（以下次號）

長崎に於ける一種の傳染病

長崎市内には是迄肺チストマ患者なかりしに近頃俄に患者を發したり其病源は居留地の淸國人より傳播したるものなりと而して之れに罹る者は吐血するに至る迄は病の身にあるを覺らす漸次衰弱して身を斃すに至るものにして岡山縣下の某村の如きは一村傳播して救濟の術に苦しむといふ何れも黴菌より傳染するものにして之れが豫防をなすには藥劑を以てするか又は熱湯を以て患者の痰に注けば能く之を殺すことを得れども支那人の衞生に不注意なるには當局の人々も頗る困難せりといふ。

酒を嫌にする新法

倫敦より近着の某雜誌に一奇新法を掲けて曰く米國の醫師某は黃金を用ゐて酒好の者を嫌ひにする新法

など發明せり其法は溶解したる黄金を一日四五回づゝ人躰に注射することなり然るときは一ヶ月を經過せざる中に如何なる酒好家も忽ち嫌ひになるといふ而して同氏は專ら右の法を以て「アルコール」中毒の患者に施こし居るに効驗極めて多しといふ

樟腦酎製法

久しく貯ふれば其氣散消す三日位は用ゆべし

樟腦一匁に好焼酎一合に入れ、とかしたるものなり、急に製するには、美濃紙を以て、茶碗にふたの如く引はり、ゆるまぬやうに、下にて紙のはしを握り、太皷の如くはりつめ、其眞中に、樟腦のあら末にこわしたるを二三分のせ其上より強き火の、火のしをあて、押せば樟腦は紙をこして霜の如く、茶碗の中につくなり、それに焼酎を入るれば、忽ち解けて、即座樟腦酎となるなり。

「レーマチス」の痛所又は、打身の痛ところ、くたびれたる足肩のはりたる所等へ、にぬりてよく其痛を去るなり、

芥子泥の製

芥子の粉　三分　小麥粉　二分を、酢にてかき、ねりたるなり、

「レーマチス」の痛む所に木綿布にのべ、張りて効あり又卒倒したる、人或は驚風の小兒引つけたる時など足のうらにはれば、第一は其痛みを、醒覺し第二には上にのぼりたる血熱を、下に引さぐるなり、只餘り久しく張りおくべからず、又湯に入れんと思ふ病者には張るべからず、其部に湯のしみたること甚だはげしく堪ゆべからざるが故なり、

百九十五翁養生法

松平伊豆守殿領分三洲寶飯郡小泉村
百姓　萬平
（當辰百九十五）

右之者應長七年寅年出生　有徳院様御代　竹千代

君樣御誕生之節被ニ召出一白髮獻上仕御扶持百五十人扶持頂戴其後種姫樣御入輿之節被召又候白髮獻上仕御扶持百人分被ニ下置一都合二百五十人分頂戴仕候　萬平妻（百七十三歲）子供五人惣領（百五十三歲）孫十八人總領（百三十二歲）右長命之儀段々御尋ね御坐候處別而養生と申も不ㇾ仕　先祖より代々毎月兩三里へ灸治仕候其數左の通り

朔日　左十一　右十一　二日　左十　右九　三日　左十一　右十

五日　左十　右九　六日　左九　右八　八日　左八　右八

右之通毎月灸治仕候者無病にて長命の由先祖より申傳により家內不殘灸治仕候右之趣當四月十五日御尋に付書附奉差上候但大坂御陣之節萬平十四歲にて御座候

寛政八辰年十一月廿三日

（右三件衛生寶鑑第七編）

凍瘡療法

サールフエルド氏の說に據れば、凍瘡に用ゐる數多の藥品中には其効至て少なき或は疑はしきものあり例へば酸類を稀釋して用ふるの他、尚單寧、硼砂、明礬、樟腦、イヒチオール、古魯胄謨、沃度等を試むることあり、彈力古魯胄謨は時として良効を奏することとあり、沃度は丁幾とし、或は之に等分の沒食子丁幾を加へ、若くは十乃至二十%の沃度古魯胄謨として用ひ、「イヒチオール」は五十%の軟膏として用ふることあり、其他の處方は左の如し

○パスキス氏方　單寧酸二、○瓦、屈里設林或は樟腦精五○、○瓦、右患部に塗り付くべし

○カリエール氏方　樟腦末三、○瓦　剌納林一五。○瓦　華攝林一五、○瓦、鹽酸二、○瓦　右軟膏となし毎夜患部に貼用すべし

○フーゼマン氏方　明礬二、○瓦　硼砂二、○瓦

薔薇水一五〇、〇瓦　安息丁幾五、〇瓦　右溶和し患部に用ふべし

○フーゼマン氏方

明礬四、〇瓦　煮熟卵黄一顆

傴里設林二、〇瓦　右混合して外用すべし

（藥業雜誌）

痲疹患者

秋田縣秋田市に於て本年十月下旬より痲疹患者發生漸次流行の兆あるも概ね輕症にして僅々一週間を出でずして全治せり今十一月二十七日より本月六日まで屆出の患者數を聚れば百三十四人内全治六十人なり

震災地と黄疸

岐阜、愛知地方に於て震災後種々異常の病症流行し又は不具者出産するの不幸を來せしが震災後寒風に晒され或は不良の食物を食ひ或は營養を怠りし等の結果にや岐阜市には先頃より種々の病人にして稍々快癒に至らんとする時は必ず黄疸を煩ふ由此程同地の人は語れり

赤痢患者

大坂府外七縣に於ける赤痢患者報告は左の如し

◎大坂府に於ける去月十二日より同十八日に至る一週間屆出の赤痢患者は合計十六人にして死亡十六なり

◎兵庫縣に於ける去る十一月廿六日より十二月二日に至る一週間屆出の赤痢患者は合計九十四人前週より減ずること五十八人同三日より九日に至る一週間屆出の同患者は合計三十三人前週より減ずること六十一人新舊患者の總數四千二百二十三人なり

◎奈良縣に於ける去十一月中の赤痢患者は合計六十人にして内死亡二十五人なり

◎高知縣に於ける去十二月三日より同十六日に至る二週間屆出の赤痢患者は合計五十七人死亡十四人にして初發よりの總患者二千六百五十三人内死亡

五百二十二人なり

◎大分縣に於る去十一月廿七日より十二月十日に至る二週間届出の赤痢患者は合計三百六十六人なり

◎熊本縣に於ける赤痢患者は去月三日より同九日に至る一週間届出數は合計二百八十三人死亡七十五人にして初發よりの總患者一万八百〇九人内死亡千八百六十九人なり

◎宮崎縣に於ける去月八日より同十四日に至る一週間届出の赤痢患者は合計二百十人にして死亡九人初發よりの總患者三千三百二十六人内死亡數四百九十七人なり

（十二月二十六日官報に據る）

本會録事

入會者

明治廿五年十二月より仝廿六年一月に至る入會者は左の如し

◎會員安藝つね子の紹介により

一本郷第一醫院　四柳とみ子
一仝　石川せき子
一仝　稻垣みち子
一仝　堀すみ子

◎會員塩とせ子の紹介により

一本郷第一醫院　前川てる子

◎會員永井くに子の紹介により

千葉縣安房國長狹郡鴨川町前原十三番地第二號　安田こう子
同國同郡天津町天津千二百三番地　渡邊せい子
同　千九百六十番地　岡本みな子

退會者

一和田八重子　佐藤くに子
一井上稲子　群馬縣　吉田のぶ子

轉居

一下谷池端茅町二丁目廿四番地へ　榊原あや子
一日本橋本白銀町二十番地へ　馬場ぬい子

日本看護婦會假規則

第一條　本會ハ醫科大學ニ於テ看護法講習科ヲ卒業セシ者及ビ各病院ニテ熟練セシ者ヲ以テ組立テ汎ク患者ノ需ニ應ジテ派出スルモノトス

第二條　派出看護婦ハ左ノ等級ニ應ジテ費用ヲ申受クルモノトス

一等一日分　金六拾錢　二等一日分　金四拾五錢

三等一日分　金三十錢

但シ一ケ月契約費用ハ左ノ如シ

一等　金拾三圓　二等　金拾圓　三等　金七圓

第三條　傳染性病者ノ看護ハ特ニ左ノ費用ヲ申受クルモノトス

一等一日分　金壹圓　二等一日分　金七拾錢

第四條　看護婦派出ヲ要スル人ハ左ノ證書ヲ出サレタシ

證　［印］

一　今般誰某看護ノ爲メ貴會何等看護婦ノ派出ヲ相仰キ候上ハ御規則ニ從ヒ費用ヲ負擔スルハ勿論一切違背申間敷候也

月　日　何區何町何番地　誰　某　印

日本看護婦會御中

第五條　非傳染性疾患ニシテ後傳染性疾患ニ變ゼシ者或ハ傳染性非傳染性未定ノ疾患ニシテ後傳染性ト決セル者ハ其決定ノ日ヨリ傳染性疾患ノ看護費ヲ申受クルモノトス

但シ傳染性ト決セシ片ハ其時日ヲ本會ヘ通知セラルベシ

第六條　派出看護婦ノ往復費用食物等ハ依頼者ニ於テ負擔スルモノトス

第七條　派出看護婦ノ費用ハ毎月十日二十日月末ニ受領證ト引換ニ渡サルベシ

第八條　派出看護婦ヲ病者看護ノ外他ノ雜用ニ使役スルヿヲ謝絶ス尤モ病者ノ食物ハ一切看護婦ノ司トル所トナス

第九條　重病ノ患者ニテ連夜看護ヲ爲ス片ハ一晝夜内ニ少ナクモ六時間以上病室ヲ離レ休息ヲ與ヘラルベシ看護婦ハ本會ヨリ請求スル時ニ非ザレバ猥リニ病家ヲ外出セザルベシ

第十條　派出看護婦ハ醫師ノ指揮ナクシテ病症ノ輕重ヲ口外セザルベシ

第十一條　轉地療養ノ目的ニテ看護婦ヲ遠隔ナル地ヘ同行セントスル時ハ一應本會ヘ照會セラルベシ

第十二條　派出看護婦ニ於テ要務ヲ怠ルカ或ハ不正ノ所爲アル片ハ速ニ本會ヘ通知セラルベシ

第十三條　派出看護婦ヲ解雇セラル丶片ハ其前日本會ヘ通知セラルベシ

日本橋區本銀町一丁目廿番地（龍閑橋際）

日本看護婦會事務所

馬場縫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

保健食料ノ標準

第三例

豆腐	二拾五匁
豆腐皮（ユバ）	三匁
胡麻油	一匁
味噌	拾匁
豌豆	拾五匁
比目魚（ヒラメ）	二拾五匁
鷄肉	三拾匁
白米	四合

蛋白質	二七、四〇匁
脂肪	五二、四匁
含水炭素	一一七、三七匁

右食料金八錢四厘

第四例

味噌	拾匁
菜豆（インゲンマメ）	拾五匁
昆布	七匁
牛肉	三十匁
馬鈴薯	三拾匁
裙帶菜（ワカメ）	一匁
鰺（アジ）	二拾五匁
油揚	拾匁
バタ	八匁
白米	三合五勺

蛋白質	二五、八七匁
脂肪	一二、五四匁
含水炭素	一〇九、二二匁

右食料金十三錢三厘

第五例

味噌	五匁
鷄卵	三個
菠薐草（ハウレンサウ）	二拾一匁
馬鈴薯	三拾匁
豆腐	四拾匁
比目魚	四拾匁
豚肉	拾八匁
白米	三合七勺

蛋白質	二五、八二匁
脂肪	一三、〇七匁
含水炭素	一〇八、三一匁

右食料金九錢八厘

第六例

牛肉	六拾匁
鷄卵	二個
麵包	一斤半
バタ	七匁
馬鈴薯	五拾匁

蛋白質	二五、七四匁
脂肪	一二、七八匁
含水炭素	一〇、四三匁

右食料金二十二錢二厘

發行所　東京下谷區練塀町四十三番地　私立大日本婦人衛生會

編輯兼發行人　東京麴町區三番町六十七番地　巖本善治

印刷人　東京麴町區上二番町四十四番地　八木吉六

明治二十六年二月[illegible]